

本号はボリュームが大きいので2通に分けて配信しています

## INDEX

- 1 モルモンシンドローム
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(9)  
確信犯の大嘘つきゴードン・ヒンクレー・・・その(1)
- 3 連載 リアホナを斬る (第9回)木塚灯八  
2006年7月号 大管長会メッセージ「御父と御子と聖霊を信じる」

### モルモンシンドローム るう@大喜多秀起

「あなたの心の病気を(モルモン)教会のせいにするな」そんな心無い言葉を何度も目にしたことがある。モルモン教徒が元モルモン教徒で心の病気を持った人に対して吐いたものだ。

モルモン擁護のウェブサイトで、時に批判系のBBSで。最近では会員制のコミュニティの主催者で自ら分をわきまえるべき人物(不活発モルモン教徒)でさえ、この種の中傷を平気で述べていた。

モルモン教に限らないがカルト宗教のマインド・コントロールが「心の病気」あるいは病気以前の弱った状態を悪化させるということは明白だ。私たちは経験として、また実例をもってそれを知っている。戒律至上主義に上層部の無責任、時間と財産の搾取・・・。最後には「信じていれば病気も治るはず」(直らないのは信仰が足りないから)と言う強迫観念が心をどんどん破壊して行く。それは元から心に病気があった人、弱っていた人だけに限らない。モルモンと言う社会に所属する全員にこの「浸食作用」は及ぶ。誰も健全な精神でいることはできなくなる。しかし、同病の仲間のなかでは、それに気がつかない。いわば「心の生活習慣病」なのだ。カルト教義で知識が肥満、思考回路は動脈硬化し、戒律と罰が判断を硬直化させ、エリート意識がやさしさを喪失させる。ところが、周囲は生活習慣をひとつにしているから、自らの症状を自覚できない。

皆が肥満であれば、それが標準となろう。なかにととう健康を害してしまった人が、生活を改善しようとダイエットにウォーキングに努力しだすと「お前は病気だったんだ」と腹をさすりながら嘲笑している。そんな構図が、冒頭の如き言葉を発する無神経な人物に重なる。

彼らはその暴言自体が自らの「心の不健康」を宣言してしまっていることに気がつくべきだ。そして、自らを恥じなければならぬ。病気になること自体は悪いことではない。しかし、「心の病気」を自覚し、様々な治療を受けることには大変な勇気が必要である。治そうと自ら戦うことはむしろ尊敬されるべきだ。自らの生活環境を変える工夫も出来ない人間はコメントすることすらさわしくない。

### 高橋弘のモルモン人物伝(9) 確信犯の大嘘つきゴードン・ヒンクレー・・・その(1)

ゴードン・B・ヒンクレーはモルモン教団のトップ(大管長)であり、その高齢(来る7月19日で96歳になる)にもかかわらずモルモン教のイメージアップのために積極的な広報活動を行ってきた。略歴は省略するが、本題に入る前に一つだけ特記しておきたいことは、1981年以来モルモン教団を実際にリードしてきたのはヒンクレーだったという事実である。

(スペンサー・キムポールが大管長のとき、教団の止むを得ない事情のため1981年にヒンクレーが副管長補佐として起用された。当時、大管長は硬膜下血腫のため手術を受けており、二人の副管長エルドン・タナーとマリオン・ロムニーはパーキンソン病で仕事ができる状態ではなかった。この窮地を脱するためにヒンクレーが起用されたわけである。1982年のタナーの死亡によって、ロムニーが第一副管長、ヒンクレーが第二副管長に昇進した。1985年、超保守的でやり手のエズラ・タフト・ベンソンが大管長に就任したが、就任時には既に86歳で記憶も定かでなく、大管長就任の間ただの飾り・看板の役割しか果たしていない。第一副管長になったヒンクレー(70歳)は、第二副管長に就任したトーマス・モンソン(53歳)とともに教団の実質的な実権を握った。ベンソンの死後、1994年、ハワード・ハンターが病気のまま大管長になるが、翌年死亡。)

1995年、それまで影で実権を握っていたヒンクレー(85歳)が、こうして公的には初めて大管長、預言者、先見者、(神の)啓示の受け手、(啓示や聖書、モルモン書等)の解釈者として表舞台に立ったのである。そういう訳で、1981年以来25年以上にわたってモルモン教会を実質的に指導し、舵取りをしてきたのはゴードン・ヒンクレーであったことを強調しておきたい。

今回上げるのは、大管長ヒンクレーが新聞・雑誌・TVなどのメディアを通して全国にばらまいた発言であるが、その発言にはモルモン教の暗い過去を隠し、明るいイメージを植えつけようという意図的がみえみえのウソとゴマカシ

ツキリとさせておきたいからである。全世界の一千万人の信徒を指導する老人ヒンクレーは、したたかな男ではあるが、著しく誠実さに欠ける信用のできな人間である。ヒンクレーを一言で特徴づけるなら、宗教としての内実は実際には破綻し形骸化してはいるが、全体主義的な統制によって宗教としての制裁を整え、ひたすら信徒からカネを集める集金マシンと化した宗教のしたたかな指導者、である。

#### 【ヒンクレーの広報活動】

ヒンクレーが大管長に就任して以来、教団指導者は積極的にマスメディアを利用し、モルモン教のイメージアップを図り、プロテスタント・キリスト教の一つであるかのようなイメージを売り込もうと努力を重ねてきた。その広報活動のいくつかは下記の通りである。

1996年4月7日、CBS-TV、60 minutes の番組に出演、大管長ヒンクレーほか、いろいろなモルモン教徒がマイク・ウォレス記者のインタビューを受ける。  
<http://www.watchman.org/lds/hstintro.htm>

1997年4月13日、新聞San Francisco Chronicle宗教担当編集者Don Lattinによる大管長ヒンクレーへのインタビュー

(記事は <http://www.tungate.com/GBH4.htm> )

1997年8月4日、雑誌 Time誌 (タイム誌に依頼されて大管長ヒンクレーにインタビューしたのは、Mormon Americaの著者で、タイム誌のベテラン通信員で、共同通信のリチャード・オストリング氏 記事は

[http://www.tungate.com/1997\\_july\\_pbs.htm](http://www.tungate.com/1997_july_pbs.htm))  
同インタビューは、1997年7月18日のPBS-TV、ジム・レーラー・ショウとして放映された。

そして1998年9月8日、ラリー・キング・ライヴのテレビ・ショウに大管長ヒンクレーが出演 (因みに、ラリー・キングの新しい妻はモルモン教徒である)。  
インタビューの内容は[http://www.lds-mormon.com/1kl\\_00.shtml](http://www.lds-mormon.com/1kl_00.shtml)

ところで、インタビューの内容は軽いものから真実に迫る深刻な内容まで多岐にわたっている。大管長ゴードン・ヒンクレーが相当インチキな発言・証言をしたのが、「モルモン教の信じる神の概念」「多妻婚とその実施時期・範囲」「黒人にたいする教団の方針・態度」をめぐるのである。そこで2回に分けて、ヒンクレーの発言を分析したいと思う。

#### 【モルモン教の信じる神の概念について・・・あまりに明白なウソ】

Q: There are some significant differences in your beliefs. For instance, don't Mormons believe that God was once a man?

A: I wouldn't say that. There was a little couplet coined, "As man is, God once was. As God is, man may become." Now that's more of a couplet than anything else. That gets into some pretty deep theology that we don't know very much about.

質問「あなたがた(モルモン教徒)の信仰には、いくつかの決定的な相違がありますね。たとえば、神はかつて人間だったとモルモン教徒は信じていますね」

ヒンクレー「そのような言い方をしたくありません。(神はかつて人間だった)という表現は対句形式になっています。『人間の如く、かつて神は存在し、神の如く、人間はなるであろう』。ところで、この表現はどの対句よりも対句なのです。それには(対句表現の理解には)大変深い神学が必要で、われわれもよく理解はしていません」

Q: So you're saying the church is still struggling to understand this?

A: Well, as God is, man may become. We believe in eternal progression. Very strongly. We believe that the glory of God is intelligence and whatever principle of intelligence we attain unto in this life, it will rise with us in the Resurrection. Knowledge, learning, is an eternal thing. And for that reason, we stress education. We're trying to do all we can to make of our people the ablest, best, brightest people that we can.

質問「ということは、モルモン教会はそのことを理解できず、いまだに努力を続けている、ということですか」

ヒンクレー「それはですね、神の如く、人間はなるであろう。我々は永遠の進歩・発展というものを信じているんです。(それを)とても強く信じています。我々は神の栄光が知性であり、何らかの知性をこの人生に得られるだろうと、そして復活のときにそれが我々と一緒に蘇るだろうと信じています。知識とか学習は永遠のものです。そういう理由でわれわれは教育を強調しているのです。我々は、モルモン教徒をもっとも有能で、もっとも優れていて、もっとも知的な人間になるようあらゆる努力を払っています」(San Francisco Chronicle 紙より)

同年行われたタイム誌のインタビューでは、こう答えている。

Q: Just another related question that comes up is the statements in the King Follett discourse by the Prophet.

Hinckley: Yeah

・フォレットの（葬儀の際に2万人の信徒を前にして行ったと記録されている）演説で語ったことですが・・・」  
ヒンクレー「ええ・・・」

Q: ... about that, God the Father was once a man as we were. This is something that Christian writers are always addressing. Is this the teaching of the church today, that God the Father was once a man like we are?

Hinckley: I don't know that we teach it. I don't know that we emphasize it. I haven't heard it discussed for a long time in public discourse. I don't know. I don't know all the circumstances under which that statement was made. I understand the philosophical background behind it. But I don't know a lot about it and I don't know that others know a lot about it. [emphasis added]

質問「つまり、父なる神はわれわれと同様かつては人であった、と語りました。これはキリスト教徒の記者が必ず述べることですが。今日のモルモン教会は、父なる神はわれわれと同様かつては人であったと教えているのですか」

ヒンクレー「我々がどのように教えているかどうかは知りません。その点を強調しているかどうか知りません。公の場所でそうしたことが語られるのをずいぶん長いこと聴いておりません。知らないのです。そのような演説がなされた状況というものをまったく知りません。そのこと（神はわれわれと同様かつて人であったという教え）をよくは知らないのです。また、他の方々もそのことをよく知っているとは思いません」（Time誌より）

#### 【コメント】

モルモン教の神にかんする教義は『素顔のモルモン教』のなかでも簡単にまとめてある。モルモン教は、およそキリスト教とは相容れない特異な（異教的）教義をもっている。

神は、かつて人間であった。  
人間は、神になることができる。  
数億、数兆の神々が存在する。

（「神ご自身が、かつてはわれわれ人間のようにであり、今は昇栄・昇格した人であり、かなたの天の王座に座しておられるのである・・・神がどのようにして神になったのか、教えてあげよう。神は永遠の始めから神であったとわれわれは考えるかもしれない。しかし、この考えは誤りである・・・神は、われわれのようにかつては人間であったのだ。肯り。我々すべての者の父である神ご自身が、この地上に住み、イエス・キリストがなされたのと同じことをなされたのである」（『予言者ジョセフ・スミスの教え』より）。ジョセフ・スミスがこのように教えたため、今日の「父なる神は、栄光を受け、昇栄し、不死の、復活した人である」という使徒ブルース・マコンキーの言葉が、モルモン教徒の平均的「神」理解と考えるとよい。『素顔のモルモン教』より）

こうした神々にかんする教えは、教祖スミス以来の伝統であり、初期にはモルモン教会自らその相違を強調し、他のキリスト教諸派を非難してきた。したがってモルモン教会は、いまでもこうした神々を信仰することを教えている。

しかし大管長であるゴードン・ヒンクレーは、この教義を暗に否定する。そんな教義は知りませんね～、聞いたこともありませんよ～とシラをきる。教祖スミス、ブリガム・ヤング、ミルトン・ハンター、ジョセフ・フィールディング・スミス、ブルース・マコンキーという歴代の大管長や使徒たちが講演や著作物をとおして強調してきたいわばモルモン教の基盤となる教えを、ヒンクレーはあっさり否定してきた。

しかし同時に大管長ヒンクレーは、新聞や雑誌に掲載された自分の発言の記事を必死に弁明している。1997年10月4日のモルモン教会の大会でヒンクレーは「私の発言が正しい加減に引用されている（だから、メディアに掲載された記事はデタラメだから信じるな）」と語った。しかし、タイム誌はインタビューのテープを保存しており、それを誰にでも提供しているから、ヒンクレーが信徒を欺くウソを言っていることは明らかだ。ヒンクレーは、したがって、第一に信徒を欺き、第二に大勢の一般市民を欺き、そうして第三にモルモン教の過去とその基盤を否定したのである。

では、なぜモルモン教の大管長でありながら、あまりにも明白なウソをつくのだろうか、それが不可解な点である。私が推測する理由はこうである。ヒンクレーはこうした神々の教えを恥ずべき、誤った教えだと感じていること。とくに、世界伝道を推し進める教団にとって、あまりにトンデモなくいかかわしい教義を白日の下にはさらしたくない。なぜなら伝道が難しくなるばかりか、何も知らない多くの新しい信徒を失うことになるからだ。教団の目的はただ一つ、強勢を増やすことと、献金額を増やすことである。だから、何としても異教的でいかかわしい教義は隠さねばならないのだ。

こうしてモルモン教会のトップであるヒンクレーはウソをつき続ける。そしてウソも神のためなのだと豪語する（といっても、教団幹部が神への信仰をもっているかどうかは甚だ怪しい）。しかし同時に、ウソをつき続け、人々を欺き続けることで、ヒンクレーの人間としての、さらに宗教者としてのモラルは地に墮ち、ヒンクレーがはなはだ信用のできない人間であることが明白になったのである。

<文献>

Richard N. Ostling and Joan Ostling, MORMON AMERICA: The Power and the Promise, HarperCollins Publishers Inc. New York, 1999

D. Michael Quinn, MORMON HIERARCHY: Extensions of Power, Signature Books, Salt Lake City, 1997

高橋 弘『素顔のモルモン教』新教出版社、東京、1996年

他、ウェブサイト

連載 リアホナを斬る (第9回) 木塚灯八  
2006年7月号 大管長会メッセージ「御父と御子と聖霊を信じる」

今月号のリアホナによればモルモン教会の公式ウェブサイトが全面リニューアルすることです。一般公開の予定日は7月15日だそうですから、この記事が配信されるころにはもう公開されているかもしれません。ローカル・ニュースを何ページも割いて公式サイトを自画自賛していますが、これは本来載せるべき記事が集まっていないことの裏返しのような気がします。新しい公式サイトに関しては活発モルモンの掲示板などでも話題になっているようです。今までの公式サイトはユタの教会本部の主導で作られた記事を日本語に翻訳しただけのチャチなもので、「やつつけ仕事」という感じがしないでもない状態でした。「用語集」のページは(日本語なのに)A~Zまでの索引が並び、そのどれをクリックしても「開会の祈り」だけしか表示されなかったり、「総大会説教」はPDFファイルでモルモン幹部の説教が読めるのですが、あちこちがリンク切れしているなどかなりみっともない状態でした。今回はかなり力を入れて制作しているようにローカル・ニュースでは紹介していますが、結局、素人の集団(よく言えばボランティア)がサイトを作っているようです。モルモン教会のこの辺りの中途半端な姿勢がいつもよくわかりません。一体どこまで本気で取り組んでいるのでしょうか。

さて今回はヒンクレー大管長のメッセージを取り上げます。モルモン教義によって表現されている神は、一般的なキリスト教の神の概念と大きく異なるものであるという指摘はしばしば耳にするところです。しかしモルモン教義とキリスト教の双方に対してある程度の知識と理解が無ければ、どこがどのように違うのか把握するのは困難です。モルモン教義では一般的なキリスト教の言葉を用いながらその内容は全く異なるものを意味しているということが多くありモルモン教義を説明した文章を表面的に読んでいただけでは、その独自性が隠されてしまっているのです。今月号のヒンクレー大管長の説教を例にとり、そうした点も考えてみたいと思います。

説教の冒頭部分でヒンクレー大管長は、モルモン会員が信じている事柄について誤った考えを記載したパンフレットが教会の敵対者によって作られていて、それは弱い人や知識の乏しい人を覆すことだと述べています。しかしそのパンフレットが具体的にどのようにモルモン教義を間違って記述しているのについては全く触れていません。それは、モルモン教義が誤ったものであるという批判は教会の敵対者によるものだから一切読むな、と言いたいただけだからなのです。私はむしろモルモン教会のパンフレットが、キリスト教に関する知識の乏しい人にモルモン教義がキリスト教のそれとまったく変わらないという誤った考えを持たせるために作られていると指摘したいです。

続けてヒンクレー大管長は以下のように宣言しています。

わたしは、一点の曇りもなく、無条件で、  
永遠の父なる神を信じています。神はわたしの御父、わたしの霊の御父、またすべての人の霊の御父です

表面的に見れば、これは一般的なキリスト教の信仰告白と相違無く見えてしまい、これから述べるメッセージがあたかもキリスト教の一般的な考え方であると読者に錯誤させる効果をもっています。そして聖書の一説を引用して話を続けています。

「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造らう。」(創世1:26)  
これ以上に明白な言葉があるでしょうか。ある人々がわたしたちに思い込ませようとしているように、人が神そっくりに創造されたということは、神の存在を卑しめることなのでしょうか。

ヒンクレー大管長の言う「ある人々」とはモルモン教義の誤りを指摘する人たちのことでしょうか？ 私は伝統的なキリスト教の関係者が、モルモン教義が天の父なる神がかつては一人の人間であり昇栄して完全な肉体を持ったとしている部分を、神に対する冒瀆だと指摘しているのは知っています。これはキリスト教からしてみれば至極当然に行うべき批判でしょう。しかしヒンクレー大管長はそうした指摘を故意に歪曲して説教の中に盛り込み、「ある人々が」と不明瞭にした上で、モルモン教義が聖書にかなっており、批判が的外れであるという風に話を摩り替えているのです。

ここから徐々にヒンクレー大管長はモルモン独自の教義を、一般的なキリスト教の言葉とすり合わせながら話を進めていきます。「神は霊であるから、礼

24節に対しては、「もちろん、神は霊です。あなたもそうです。霊と体が結合して命ある存在となっているのです。わたしも同じです。」という詭弁的言い回しで応え、マタイ17章 1～ 5節の「雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、『これはわたしの愛する子、わたしの心にながう者である。これに聞け』」という個所を取り上げて、モルモン書のストーリーやジョセフ・スミス最初の示現でも同じことが起こったのだと同一視させたいようです。ヒンクレー大管長はこうした話術を巧みに利用しながら以下のようなモルモン独特の教義をキリスト教の概念だと信じ込ませようと力説しています。

- ・天の父なる神が肉体を持っていること
- ・イエス・キリストの購いは、全ての人を復活させてくれるが、昇栄にあずかるのは忠実に従う者だけであること
- ・天の父なる神と御子イエス・キリストと聖霊が別々の存在であること

モルモン教会は近年、モルモン教会を伝統的キリスト教と何ら変わらない宗教であると思せかける戦略を打ち出し、正式名称に「イエス・キリスト」が含まれていることを強調したり、モルモン書にも「イエス・キリストについてのもう一つの証」とサブタイトルを銘打っています。そうした動きと考えながら今回のヒンクレー大管長の話を読むと興味深く思えました。

私の正直な気持ちを言えば、神が肉体を持っているとか、人間がやがて神になると言う宗教があってもそれはそれでかまわないだろうと思います。しかしそれならばキリスト教であるとは言えないことは自覚すべきだし、ましてや今回の説教のように詭弁的な言い回しでキリスト教との整合を図ろうとすべきでもないでしょう。こうした重要な部分に不誠実なモルモン教会は、やはりキリスト教のように見せかけながら、その実態は宗教ビジネスなのではないかと思えます。

\* \* \* \* \* 以下後半部に続く \* \* \* \* \*